

# 第18回医療の質・安全学会学術集会開催

第18回医療の質・安全学会学術集会(大会長=近畿大・辰巳陽一氏)が11月25~26日、「世界はチームでできている——多様性の森へようこそ」をテーマに神戸国際展示場(神戸市)、他にて開催された。本紙では、パネルディスカッション「多職種で診断の質を改善する——診断エクセレンスの現場での実装の具体例」(企画提案=多摩総合医療センター・綿貫聡氏, 座長=七条診療所・小泉俊三氏, 名大・栗原健氏)の様態を報告する。

## ◆今や診断は、医師個人で行うものではなく、医療職がチームとして向き合うもの

セッションの開始に先立ち、国内外の診断エラー、診断エクセレンスの潮流について発表した栗原氏は、これまで医師個人に注目されがちであった診断エラー対策が、患者・家族や多職種による組織的な対策へと変化してきていることを年表(表)を示しながら解説し、診断の安全性の管理において医療安全管理者のさらなる関与が求められるとした。「正確な診断は患者の治療や治療方針を決定する上で非常に重要であり、誤った診断は患者に深刻な影響を与える可能性がある」。診断の質を高める意義をこう述べた綿貫氏は診断エラー、診断エクセレンスの定義を次のように紹介した。

### 診断エラー<sup>1,2)</sup>

●患者の健康問題について正確で適時な解釈がなされないこと、もしくはその説明が患者になされないこと

### 診断エクセレンス<sup>3)</sup>

●患者の状態について正確かつ的確な説明をするための最適な診断プロセス



●写真 大会長の辰巳陽一氏

「医療チームの立体構造を考える」と題して大会長講演を務めた辰巳氏。ノンテクニカルスキルの向上を目的としたTeamSTEPPS®の推奨、また心理的安全性の担保の重要性を訴えた。

こうした定義を踏まえた上で診断エラーが起こる理由として、①診断プロセスの複雑性、②認知バイアスの影響、③システム(環境)の影響を挙げ、特に②に起因するエラーについては多職種で情報統合をしていく過程で発生していることを共有し、参加者に注意を促した<sup>4)</sup>。

続いて登壇した木村泰氏(練馬光が丘病院)は、理学療法士の立場から診断の質を向上させるための方策を提案した。氏はまず、国際的な理学療法士の組織である世界理学療法連盟(World Physiotherapy)が公開する理学療法士のコンピテンシー<sup>5)</sup>の中で、医療の質の改善活動が求められていることを紹介。理学療法士が診断の質に貢献できる一例として、患者がどのような生活動作場面で症状を訴えるかを評価し医師へフィードバックすること、患者をエンパワーメントし診療へのエンゲージメントを高めることなどを列挙した。他方、理学療法士が診断エラー対策にかかわれることを自覚してもらうための教育や、理学療法士が関与したこ

●表 医療の質・患者安全学から見た、診断エラー/エクセレンスの流れ(栗原氏提供)

	日本	世界
2008年		診断エラーに関する学会(DEM)が発足
2012	日本医療機能評価機構が発行する「医療安全情報」で、画像診断報告書の確認不足の注意喚起	
2015		全米医学アカデミーが「Improving Diagnosis in Health Care」を発刊
2016	画像診断報告書の確認不足に関する事案の報道が全国的に相次ぐ	WHOが「Technical Series on Safer Primary Care: Diagnostic Errors」というレポートを作成
2017		第2回国際患者安全サミットで診断エラーが議題の1つに
2018	医療の質・安全学会誌で診断エラーを特集	
2020	医療の質・安全学会に「診断改善WG」が発足	
2021		WHO「世界患者安全行動計画2021-2030」において診断の安全性について言及
2022	画像・病理診断報告書の組織的な適切管理を評価する、報告書管理体制加算が新設	診断エクセレンスの概念の普及
2024	医療安全全国共同行動の患者安全行動計画に「診断・治療選択における安全確保」が設置	JCI基準第8版で国際患者安全目標の1つとして「診断エラーの低減」が追加予定(Draft)

色文字部分は、栗原氏が考える近年でターニングポイントとなる事項。  
DEM: Diagnostic Error in Medicine, JCI: Joint Commission International

## 【第7回】 遺伝

「遺伝(遺傳)」を『大漢和辞典』(大修館書店)で調べると、①として「のこしたえる」の説明があり、司馬遷により紀元前に書かれた『史記』の一文が例示されている。②として、「祖先の体質・性格が子孫に伝はること」とある。①が原義であり、②は現代のheredityに相当する。

②の意味で本邦において最初に用いられたのは、司馬凌海(1839~1879)の『七新薬』(1862)の中である[『日本国語大辞典』(小学館)]。司馬凌海は江戸で松本良甫と松本良順にオランダ語と医学を学び、その後長崎で海軍伝習所のオランダ軍医ボンベに師事した。『七新薬』はボンベから教わった新薬を解説したもので、ヨード、硝酸銀、酒石酸塩、キニーネ、サントニン、モルヒネ、肝油の7種が載っていた。「遺伝」は肝油の項の「錢癩【タムシ】を患ふる者甚だ多し、其因由を熟察するに、半ば遺伝に係り、半ば風土に由る」という一文に登場する。1862年頃にはくしくもメンデルがエンドウ豆での遺伝実験を行っていた。

「遺伝」という用語には触れられていないが、肝油のことは村田忠一の「幕末福岡藩における薬用魚肝油の製造とその利用」(科学史研究, 2000; 39: 37-40)に詳しい。同様に「遺伝」については出てこないが、名大名誉教授の高橋昭先生が「『七新薬』と司馬凌海」(神経治療, 1998; 15: 225-30)という総説を著しており、西欧式薬物治療が日本に導入された事始めが詳しく書かれている。司馬凌海がその後に愛知県公立病院・公立医学講習所に着任していることに関心を深くされたものと思う。②の意味での「遺伝」が中国に逆輸出されたのは日本で最初に登場したとされる1862年から後れること19年の1881年という(『新華外来詞詞典』)。

なお、『日本国語大辞典』によると、本邦での②の医学外の用例は、夏目漱石の『吾輩は猫である』(1905~06)における「先天的形体の遺伝は無論の事、許さねばなりません」が最初で、①のほうは『輿地誌略』(1826)における「翁加里一王国を建(て)、其名を今に遺伝するなり」が最初という。

とで診断エラーの予防につながった事例の把握も同時に進めていくことの重要性にも言及した。

診断について協議する場への薬剤師の積極的な参加を促したのは、練馬光が丘病院薬剤室の榎本貴一氏である。「薬剤師の臨床業務は国内で標準化されているとは言えない」と評した同氏は、高齢化に伴い、多疾患を併存したポリファーマシー患者の増加による薬剤有害事象の見逃しや同定の遅れを懸念する。薬剤性と薬剤性以外の症状の鑑別について多職種と議論するために臨床推論の力を涵養していく必要性を訴えるなど、診断の質への薬剤師のさらなる貢献を求めた。

「業務時間の多くを患者の直接的なケアに費やす看護師の診断プロセスへの貢献度は高い」と分析する看護師の谷口かおり氏(島根大)は、診断の質向上の実現に際して求められる看護師

の役割として、①患者のモニタリング、②診断にかかわる情報の報告・共有、③患者・家族の代弁者、④多職種と患者間でのコミュニケーションの最適化を挙げる。その一方で、「自身の判断が間違っていたら」「夜遅い時間に報告して怒られないだろうか」など、医師・看護師間のコンフリクトが診断の質に影響することを指摘。「診断エラーの最後の砦」として看護師が自律性を発揮していくべきとの考えを示し、発表をまとめた。

### ●参考文献・URL

- 1) National Academies of Sciences, et al. Improving Diagnosis in Health Care. 2015
- 2) 綿貫聡. 診断エラーとは何か?. 医療の質・安全会誌. 2018; 13 (1): 38-41.
- 3) JAMA. 2021 [PMID: 34709367]
- 4) Arch Intern Med. 2005 [PMID: 16009864]
- 5) World Physiotherapy. Physiotherapist education framework. 2021. <https://bit.ly/47UREjx>



福武 敏夫  
亀田メディカルセンター 脳神経内科部長

# Pocket Drugs 2024

ポケットドラッグズ

監修: 福井 次矢    編集: 小松 康宏, 渡邊 裕司

医学書院

書籍詳細

臨床現場で本当に必要な情報だけをまとめた

## ポケット判医薬品集

- 主な内服薬の写真入り
- ハイリスク薬など安全性情報も充実
- 文庫本サイズ

# カラフル&コンパクト

● A6 頁1248 2023年12月発売 定価: 4,840円(本体4,400円+税10%) [ISBN 978-4-260-05278-8]

カラフル&コンパクト  
知りたい情報がパッと見つかる。  
エビデンス 選び方・使い方 薬剤写真